東京大学教養学部哲学・科学史部会　哲学・科学史論叢第十二号　平成22年1月（67-92）

道具・事物・自然

――ハイデガー『存在と時間』と実在問題――

池田　喬

序

『存在と時間』第四三節において、ハイデガーは、「外的世界は存在するのか、それは証明可能なのか」（SZ, 206）を問う伝統的な「実在問題（Realitätsproblem）」（201, 206）の批判に取り組んでいる(1)。特に、「〈哲学のスキャンダル〉は、この証明がなお欠けているということではなく、そうした証明が繰り返し期待され試みられていることの内に存する」（205）という（明らかにカントを揶揄した）一節には、以前から多くのハイデガー学者が注目してきた。ゲートマンによれば、ここでは実在問題の「問題設定に無意味の判定が下されている」(2) のであり、ハイデガーはこの問題を「仮象問題（Scheinproblem）」として「消去」(3) することを企てているのである。

しかし、実在問題が無意味になるとか仮象問題と判明するとは、一体どういうことなのか。この点については、『存在と時間』における〈事物的存在性（Vorhandenheit）に対する道具的存在性（Zuhandehheit）の優位〉と呼ばれるものに訴えて説明するのが研究者の常となっている。ハイデガーの哲学の核にあるのは、「徹底したプラグマティズム」(4) または「実践的全体論（practical holism）」(5) と呼ぶべき実践主義の立場であり、彼は、現存在の実

践的理解に依存または相関してのみ出会われる「道具（Zeug）」という存在者を見出した。現存在に存在者が出会われる日常的様式はこうした道具との配慮的交渉であり、この交渉に没入している限り、心の外部に単に出来する「事物（Ding）」という発想は問題になりえないというわけである。

このような解釈は極めて一般的なものであるが、私としては、このように考えた場合、「存在者（Seiendes）は、それを通じて開示され、発見され、規定されるような、経験、知識、把握からは独立に（unabhängig）存在する」（SZ, 183）というような実在論的言明をハイデガーが随所で繰り返していることをどう理解できるのか、と問いたい(6)。この一文を額面通りに受け取るならば、ハイデガーは実在論と観念論の〈中間領域〉を形成するような存在者を見出して、実在問題の「消去」を図っているのではない。むしろ、存在者の独立性を主張する何らかの実在論を擁護することで、この問題の解決に乗り出そうとしているように思えるのである。しかもその場合、例えば同時代のドイツで盛んに試みられたような感覚所与に基づく外的世界（の認識の客観性）の証明に期待することは拒絶されているのだから、その解決はハイデガーなりに練られた現象学的なものであるはずである。

無論、実践主義的な解釈を支持する論者の全てが、こうした問題に無頓着なわけではない。例えばカーマンやドレイファスのように、上記の一文に注意を払ってハイデガーの「存在者的実在論（ontic realism）」(7) や「粗野な実在論（robust realism）」(8) を読み取ろうとする試みは、近年むしろ増えている。しかし、私が賛同しかねるのは、道具的存在性と事物的存在性というハイデガーのカテゴリーの内、存在者的実在論のテーゼは後者にのみ関係すると彼らが頭から前提していることである(9)。この前提が彼らの共有する実践主義的解釈から導き出されていることは言うまでもない。もし、剥き出しの事物的存在者に対して「道具的存在者に解釈学的優位を与え」(10)、かつ、この道具的存在者は「私たちがそれらを有意味にする（make sense）実践や解釈によってそれ自体構成される」(11) とハイデガーが考えているのだとすれば、存在者の独立性や実在性は、実践による構成を免れたもの、非道具的な

ものとしての事物的存在者に求められるほかなくなる。

しかし、ハイデガーは「存在者は、経験、知識、把握からは独立に存在する」と言っているのであり、〈事物は実践から独立に存在する〉と直接述べているわけではない。他方、ハイデガーにおいては、「存在者」という語によって道具と事物が共に――それも一次的には道具のことが――名指されていることは明らかである。実際、ハイデガーは、「実在性は、存在論的な名称である以上は世界内部的な存在者に関係付けられている。この名称がこうした存在仕方を表示するために役立つのだとすれば、道具的存在性と事物的存在性は実在性の様態として機能する」(SZ, 211) と述べてもいる。こうした点を考慮するならば、「存在者的実在論」と呼ばれるものは、〈道具が何のために存在するか〉ということさえも、実践を含む現存在のあらゆる活動から独立しているということを明らかにするもののはずではないだろうか。そして、もしそうだとすれば、ハイデガーにおいて道具とは「私たちが有意味にする実践や解釈によって構成される」ものだという一般的解釈は誤りであることになるし、また、ハイデガーの実在論は従来考えられてきたよりもずっと広範なものになるだろう。

本論ではまず、「存在者的実在論」という研究テーマが比較的新しいという現状に鑑み、その解釈の方向性の正当さと、それがハイデガー解釈にもたらしうる射程を明らかにすることから始める（第一章）。その上で、『存在と時間』における道具の「自体存在（An-sich-sein）」に対する論及の検討（第二章）、「適所を得させる（bewenden lassen）」という概念の再解釈（第三章）、その議論背景としてのアリストテレス『自然学』の重要性の指摘などを通じて（第四章）、道具的存在者の実在論の内実を明確にする。これらの議論を踏まえた上で、次に、ハイデガーにおける事物的存在者の実在論を再構成し（第五章）、反科学的哲学者という一般的なイメージとは異なり、科学的探求の対象としての物質的自然についてもハイデガーは積極的な実在論を採っていることを示す（第六章）。

一、存在者的実在論の射程

序論で引用した「存在者（Seiendes）は、それを通じて開示され、発見され、規定されるような、経験、知識、把握からは独立に存在する」という『存在と時間』の一節には、実のところ、「存在（Sein）は、存在理解内容といったものが自らの存在に属する存在者の理解の内でのみ〈存在する（ist）〉」（SZ, 183）という文が続いている。前半部は実在論的、後半部は観念論的に響くこの箇所は近年、『存在と時間』の「パズルパッセージ」[12] として研究者間で注目を集めており、ゲートマンのような実在問題の「消去」説で片付くかのように思われた「ハイデガーと実在問題」の解釈は再熱している感がある。

とは言え、このパズルパッセージは、ハイデガーの所謂「存在論的差異（ontologische Differenz）」を考慮することで、かなりの程度解き明かされる。すなわち、前半部は存在者についての言明であり、後半部は存在についての言明なのであって、当面、カントの「経験的実在論」と「超越論的観念論」の共存と類比的に、「存在者的実在論」と「存在観念論」と名付けることから解釈を始めれば良いと考えられるのである[13]。とは言え、「存在者的実在論」の名付け親であるカーマンが指摘するように、存在者的実在論という名称には問題がなくても、存在観念論という名称は重大な誤りを犯しているというのは正当だろう。というのも、後半部の〈存在する〉に括弧がついていることからも示唆されているように、存在者は存在するとか実在するということは言えても、存在が存在するとか、実在するとか実在しないということは、存在論的差異の原則からして不可能だからである[14]。したがって、存在については実在論も観念論も語れないのであり、「実在問題」は「存在者」について解明されなくてはならない。

このような指摘は、当面、ハイデガーの術語をもてあそんでいるようにしか見えないかもしれないし、カーマン

らが「存在者的実在論」という研究領域の発見自体の意義についてそれ以上の議論を展開しているわけではない。しかし、私の見るところ、諸講義録でハイデガーが繰り返してきた実在問題への言及をも考慮することで、「存在者的実在論」の発見の広い射程はさらに明らかにすることができる。

一九一二年にはじめてハイデガーが公刊した論文が「現代哲学における実在性の問題」であったように、「実在問題」は二〇世紀初頭の哲学界の主要な関心事であった。一九一九年戦時緊急学期や一九一九・二〇年冬学期講義でも繰り返されるように、ハイデガーは当時のドイツ哲学の状況を、哲学的心理学者キュルペを代表とする「批判的実在論」とナートルプを代表とするマールブルク学派の「批判的観念論」の対決として描き出している。ここで注目したいのは、二〇世紀の「認識論的」な関心において、実在問題は「外的世界（Außenwelt）」の存在証明の問題として通常定式化されるということである。しかし、存在論的差異の原則に従うならば、「世界」は「存在者」がその内で存在する場であって、「存在」と同様に、それ自身存在者ではないのだから、外的世界の実在への問いは成立しない。実際、外的世界の実在問題と称される問題設定において論じられているのは、自称とは異なり、「世界」の実在でないことが稀でない。例えば、「批判的実在論」のように、認識の出発点とされる感覚所与が、外部に実在する原因――空気の振動など――が感覚を結果することで生じる仕方を示そうとする場合（vgl., GA56/57, 80-81）、問題になっているのは実際には個別の認識対象であり、存在者である。

実在問題に含まれる混乱はハイデガー自身が指摘するように、＜哲学のスキャンダル＞に対するカントの嘆きにその典型的表現を見いだすことができるが、しかし、カント自身はハイデガーが存在論的差異と呼ぶものに配慮が無かったわけではない。そもそも『純粋理性批判』の重要な論点の一つは、「実在性」は対象（ハイデガー的に言えば存在者）の認識の一つの「カテゴリー」であって、「世界」――対象がそれを通じて現れる感性形式である時間空間――の認識にかかわるのではないということ、むしろ、世界を認識しようとすれば理性は二律背反に陥ると

いうことだったのである。その限り、外的世界をめぐる実在問題という表現をハイデガーが用いる時には、カントではなく、カントの問題を継承していると自称する同時代の認識論者の定式化を名指していると見たほうが良い。

『存在と時間』におけるハイデガーの態度は、カントのこうした基本的洞察に明らかに連なるものである。ハイデガーにおいてもまた、道具的存在性と事物的存在という「実在性の様態」は「カテゴリー（Kategorien）」（SZ, 44）と呼ばれ、かつ、世界や存在ではなく「現存在にふさわしくない存在者の存在諸規定性」（ebd.）［強調引用者］と明示的に述べられている。他方で、「そもそも世界が存在するのかとか、この存在は証明されうるのかといった問は、世界内存在としての現存在が立てる問としては（…）無意味である」（202）と言われるように、「世界」の存在証明という問いの設定は明確に却下されている。世界や存在については実在論も観念論も語れないのであり、実在問題は、外的世界ではなく存在者の実在へと、つまり、「存在者的実在論」の問題圏へと限定されるのである。

従来、ハイデガーによる実在問題への取組みにとって存在論的差異がもつ本質的な重要性にはそれ程注意が払われてこなかった。のみならず、存在観念論説が受け入れられている限りは、この点で転倒した理解が表明されることになる。それによれば、配慮的交渉が道具的存在者に没入している限り、私の外部に存在する事物とこの事物を認識する内的主観という二元論は問題になり得ないのであり、したがって、存在者が実在するか否かという問いは失効する。つまり、存在者についての実在問題は無意味である。他方で、配慮的交渉とは、現存在の実践的理解に他ならず、しかも、「存在は存在理解内容といったものが自らの存在に属する存在者の理解の内でのみ〈存在する〉」と言われている以上、存在者が存在すること、言いかえれば、実在性、道具的存在性、事物的存在性などのカテゴリーは現存在の理解に属する。無論、この理解はハイデガーにおいて、カント的な主観の概念能力ではなく、存在者と実践的に交渉できる能力なのだから、観念論色は著しく薄められている。しかし、存在は「現存在の理解の内でのみ〈存在する〉」という限り、やはり存在については観念論であり、敢えて言えば、ハイデガーは超越論

的なプラグマティストである。

なぜ、存在論的差異についてこれ程の理解の転倒が起こるのだろうか。これについては様々な理由が考えられるが、ここで注意を傾けたいのは、「カテゴリー」という概念に対する理解である。ハイデガーはカテゴリーを「存在者の存在諸規定」としており、カテゴリーとは存在者が存在者として存在する仕方であるが、この意味でのカテゴリーに、主観が所有している認識カテゴリーという意義が持ち込まれがちなのである。例えば、存在者が道具的に存在することを、実践的な技能を所有した現存在が存在者を道具的に理解すること、と捉えるならば、道具的存在性は、多かれ少なかれ、現存在が所有する能力に帰着することになる。このことを前提した上で、例えばドレイファスのように、この理解能力は、判断の概念的能力ではなく実践的な技能であるとか、したがって、この能力は、経験に先立って与えられているものではなく、本質的に経験と共に習得されるものだとして、カント的認識論から距離を採ることが試みられる(15)。だが、混同してはならないのは、存在者を扱う能力と、存在者が存在することを理解する能力は一緒ではないということである。つまり、特定の道具を巧く使えることが、ただちに、存在者が〈道具的に存在している〉という（抽象的な）理解や道具的存在性というカテゴリーの獲得を意味するわけではない。ハイデガーが再三強調するように、さしあたって私たちに出会われているのは存在者であり、存在者がそれとして存在するための基底根拠である存在はむしろ隠されているのであり、明示的に理解されているわけではない。だからこそ存在論が要請されるのであり、問題は、自明な存在者の経験のなかでどうやって存在が――そもそも何かが道具的に存在しているということが――理解されるのかについての哲学的解明である。

こうしてみれば、「存在は（…）現存在の理解の内でのみ〈存在する〉」という一文は、存在観念論を意味するどころか、まさに否定するものだと考えるほうが自然であり、しかもこのように言うことは、現象学的研究の精神に忠実である。それ自身は存在者ではなく、むしろ存在者を何かとして規定するカテゴリーや、カテゴリー的なも

のの存在についての問いは、ごく初期のハイデガーの出発点であったが、この存在をプラトニズムや観念論など、広い意味でイデアリスティックな仮定に委ねることなく、存在者を経験する志向的作用の分析から離れずに解明すること、これこそが、一九二五年夏学期講義『時間概念の歴史への序説』で、ハイデガーがフッサールの現象学――志向性とカテゴリー的直観の分析――の核心と見なしたものに他ならなかった（vgl., bes. GA20, 97–99）。つまり、少なくともハイデガーがフッサールから学んだ現象学的哲学の中核には、カテゴリーの自己所有モデルや存在観念論を拒否することが最初から含まれているのである。

以上から、「存在者的実在論」と存在観念論の拒否のセットは、存在者のもとにあるという事実にとどまりつつ、存在が開示される仕方を説明することに課題を見いだすことができるだろう。この課題設定が原則として守られないと、存在カテゴリーは主観が所有する認識能力に――ふるまいが実践的であるか理論的であるかは存在論的差異に比べれば本質的な区別ではない――容易に転化してしまう。しかし、存在者が自らを示す（sich zeigen）――存在者を認識に従わせるのではない――ことの内で、さしあたりは隠されている存在が開示される（ことがある）というのが、ハイデガー現象学の基本構図であり、存在を主観の能力として存在者化することは断じて避けられねばならない。この原則は、存在者的実在論を提唱するカーマンやドレイファスによってさえ厳密には守られていない。事物は独立して実在するかもしれないが、道具はそうでなく、むしろ現存在の実践や解釈によって構成されるという考えが残存する限り、それがどれだけ実践的なものへと変更されていたとしても、やはり、一定の能力を所有した主体が対象の超越論的構成に従事するという図式は維持されている。すると、存在観念論説を積極的に否定するハイデガーの意図が十分に汲み取られているとは言えないのである。

二、道具の「自体存在」

『存在と時間』における存在者的実在論の具体的な検討に移ろう。すでに述べたように、カーマンやドレイファスは「存在者的実在論」を研究領域として鋭く発見したものの、原則的に実践主義的解釈を採ることによって、この実在論を事物的存在者に限定する。しかし、道具的存在性のまさに定義によれば、「道具的存在性は、それが＜それ自体＞存在しているとおりの（wie es »an sich« ist）存在者の存在論的-カテゴリー的規定である」（SZ, 71）。この引用文に見られる「それ自体」という表現は「独立性」と並んで「実在性」概念の内実を形成するものに他ならない（vgl., 207）。

ドレイファスは、道具的存在者の自体存在への言及箇所は「半分冗談のように、しかし大真面目な様子で」[16]語られたものと述べている。たしかに、道具が現存在の活動から独立に存在するという主張は「半分冗談のように」聞こえるかもしれない。何かが釘を打つために有用であるとか、重すぎて利用不可能であるといったことが、事物を有意味に理解する人間の実践を＜経由＞せずにいかに語り得るだろうか。フッサールをも含む伝統的見解によれば、道具とは「＜価値が付着した＞事物」（SZ, 68）に他ならず、価値判断を通じて裸の事物に価値が付与されたものである。主観が価値を投影することなしには、有用でも無用でもない中立的な事物があるだけであり、したがって、道具は自体的に存在するのではなく主観の価値付与によって構成される何かである。このように考える場合には、存在者は総じて一次的には事物的存在者であると見なされている。すると、道具的存在者の自体存在をめぐる議論は、価値の主観的投影主義と道具的存在性の忘却のセットに対抗するものとなるはずであり、実在性を事物的存在者へと限定して解釈しようとすれば、ハイデガーの挑戦はその重要な局面において自ずと見逃されるだろう。『存在と時間』第一篇第三章においてハイデガーは道具の自体存在について次のように述べる。

「＜環境世界＞を日常的に配慮的に気遣うことの内で、道具的に存在する道具がその＜自体存在（An-sich-sein）＞において出会われうるようになるには、目配りがそこに＜没入している＞諸々の指示（Verweisungen）や指示全体性は、この目配りにとって、ましてや非目配り的な「主題的」把握（Erfassen）にとってはますます、非主題的にとどまっていなければならない。世界が自らを告げないということは、道具的存在者が自らの目立たなさからはみ出ないことを可能にする条件なのである。これらの内で、道具的存在者の自体存在の現象的構造が構成されている。」（75）

引用文中に現れる「指示」という概念は、ハイデガーにおいて、「…のために有用であること（Dienlichkeit zu）」（78）を根本規定とする諸々の道具が、この「…」に相当する部分、つまり、「何のために（Wozu）」（ebd.）を相互に指示するという意味で用いられる。すると、引用文で指摘されているのは、例えばハンマーとの没入的交渉において、それが「何のために」有用であるのかということ、つまり、「この存在者は釘を打つために有用である」といった内容を主題的に把握する作用は必要ないということ、それどころか、退却していなくてはならないということである。道具使用のこうした「透過性（transparency）」において、道具的存在者の「自体存在」は現象的に構造化されている。これがハイデガーの主張である。

この主張が反対しているのは、例えばハンマーが「釘を磨くための何か」ではなく「釘を打つための何か」であるのは、主観の信念（ドクサ、思いなし）にすぎないとか、恣意的な価値付与の結果にすぎないという考えである。むしろ、ハンマーはそれ自体釘を打つためのものであり、釘を磨くためのものではないのである。たしかに、このことは、それが実際十全に使われている時には、熟慮なしに知られている。逆に、これは「何のためにあるのか」をなお熟慮している時や、釘を磨くためといった恣意的な目的に従わせようとする時には、道具はその自体存在を

まだ示さないか、あるいは頑なに示そうとしないだろう。

道具的存在者はそれが何のためにあるのかを主題的に把握されることがなくても、それ自体で存在する。それどころか、むしろ、目立たなさの内に身を保って、観察や熟慮の対象にされることがなければない程、ますますそれとして自体的に存在する。以上の指摘は、ハンマーだけでなく、杖、靴、舗装道路などからも直観的に理解できる。

以上の見解はたしかに新たに生まれ変わった実在論である。〈存在者は主題的に把握されなくてもそれ自体で存在する〉という前半部はそのまま読めば、従来の実在論と一致するものである。しかし、決定的に重要なことに、従来の実在論は、知覚事物として存在者を第一に理解しているため、〈存在者は観察や熟慮の対象になることがなければない程、ますますそれとして自体的に存在する〉とは言えない。むしろ、知覚されていなければ存在者が実在することに確信がもてず、このことを証明する必要に駆られるのである。

三、「解き放ち」としての「適所を得させること」

しかしながら、道具の「自体存在」についての以上の論及によって、「私たちがそれらを有意味にする実践や解釈によってそれ自体構成される」というカーマンやドレイファスのような見解が排除されているわけではまだない。たしかに、観察や熟慮は道具が十全に出会われることを妨げるかもしれないが、技能知の発揮としての別のタイプの実践的作用が存在者を道具的なものとして構成するのであり、「透過性」はこのタイプの作用の特性なのだと考える余地が残っているからである。

こうした実践的構成のテーゼが根強く支持される理由の一つは、道具的存在者の存在性格と呼ばれる「適所性（Bewandtnis）」（例えば、ハンマーが釘を打つことにおいて自らの適所を得ること）を、現存在の側から「適所を得させること（bewenden lassen）」とハイデガーが言いかえていることにあると思われる。

「適所を得させることは、存在者的に言えば、次のことを意味する。事実的に配慮的に気遣うことにおいて、道具的存在者を、それが今もう存在している通りに、またそれが存在するために、これこれとして存在させる（sein lassen）ことである。」（SZ, 84）

適所を得させることは、観察や熟慮ではないとしても、現存在がやっていることには違いないし、しかも、「存在させる」という場合の「させる（lassen）」は基本的に使役を意味する表現である。実際、この表現は、道具の実践的構成にとどまらず、価値付与の観念とも親和的であるように見えるし、さらには、恣意的な目的に存在者を従わせるという人間中心主義的で道具主義的な世界観の表明だという解釈さえ誘発する。しかし、道具的存在者の「自体存在」についての積極的論及を尊重するならば、使役として lassen を受け取る解釈が、「それが今もう存在している通りに」という重要な限定を不当に無視していることもまた、明らかであろう。

実際、ハイデガーが「存在させる」を「原則的に存在論的に把握する」（84-85）という時に提示しているのは、使役の含意が全くない「解き放ち（Freigabe）」（85）である。lassen は使役以外にも多様に語られる語であり、「解き放ち」を含意する意義としては、「妨げないこと」、「誰かまたは何かがどこかへ至りつくことを取りはからう、または実現させること」等が考慮されるべきである[17]。このことを確認することは、門脇の指摘する bewenden の自動詞的語義、つまり「（或る方向に）向く」や「或る地点までだけ行く」[18] と照合することで、存在者の解き放ちとしての「存在させる」の解釈を導くことになるだろう。つまり、「存在させる」とは、道具を十全に使用することの内で、現存在がこの存在者に「道具らしさを発揮できるように適所」[19] を得させ、「それ自身の道を歩ませる」[20] ことである。

現存在がやっていることは、道具的存在者がそれ自体ですでに存在している通りに、それ自身の道を妨げずに歩

ませることである。問題は、どういうタイプの作用によって道具が構成されるかということではない。ハイデガーが、『存在と時間』から数年後に、「存在させる」とはある種の「控え目さ（Verhaltenheit）」（GA9, 190）であると語ったように(21)、重要なのは、道具が何かのために存在できるために、この存在者を認識や目的に従わせようとする主観の振る舞いを放棄して、むしろこの存在者のほうが自分らしさを発揮できるような力の場所転換をする必要があるということ、である。

四、原料・制作・製品――アリストテレス『自然学』のコンテクスト

道具は現存在のあらゆる作用から独立して、それ自体で何かのために有用である。現存在が、道具が曇り無く出会われるためにやっていることは、自己の能力の発揮というよりも、道具が本領を発揮できるように控え目さに身を保つことである。このように言うこと自体は、実際のところ、日常的にも少なくはない。野球選手がバットという簡素な道具でボールを遠くまで飛ばすことや、彫刻刀一つで木から見事な像を作り出すことのように、一般に「技術」と呼ばれるものを学ぶ時には「力を抜く」ことが最大のコツとなる。

カーマンやドレイファスのように、たしかにこのような技術を「技能知（know-how）」と呼ぶことはできるかもしれないが、問題は、これを実践者の「能力（ability）」と呼ぶのが適当かどうか、である。技能的ふるまいは、本質的に、存在者へと向けられた志向的ふるまいである。靴紐なしに靴紐を結ぶことはできない。そして、靴紐が寒さで凍っていたら靴紐を結ぶことはできない。しかし、気温が上昇し、再び靴紐が柔らかくなれば、これを結ぶことは可能になる。これらの事実からすれば、技能的ふるまいの可能性は、今目前に存在者があるということだけでなく、その存在者がかつてどのようにあって、それからどのようになったのか、という来歴をもった存在者それ自身の――上述した bewenden の語義に引きつけて言えば――「道」にも依存する。存在者が歩むこの存在の道は、

主観の観察や熟慮だけでなく、明らかに実践からも独立している。これらの事情を鑑みると、能力という概念は、主観のふるまいの側に一面的に問題を集約させる危険がある。経験に先立って与えられていると考えるのであれ、経験と共に習得されるものと考えるのであれ、この概念には、主観が内的に所有する何かという含意があるからである。

存在者の道を妨げずにそのまま歩ませるという意味での「適所を得させる」という概念は、見かけとは異なり、存在者それ自体の存在へと考察の目を振り向けさせるものである。『存在と時間』においてこの点が最も明確に示されているのは、ハイデガーが、日常的に出会われている道具的存在者は「製品（Werk）」であることを指摘する箇所である。ハンマーで釘を打つという場合には、家という「製品」が「そのつど制作されるべきもの（das jeweilig Herzustellende）」（SZ, 69–70）として問題になっているというだけではない。家を建てるために使用されている当のハンマーや釘自体が「制作済みの製品（das hergestellte Werk）」（70）なのであるが、そこで注目されているのは、道具の「指示」には「何のために（Wozu）」だけでなく、「〈原料〉（Materialien）」または「〈自然〉（Natur）」も含まれるということである（ebd.）。「ハンマー、やっとこ、釘は、鋼、鉄、銅、岩石、木材を、それ自身において指示している――前者は後者からできている。使用される道具の内で、使用を通じて〈自然〉が共に発見されている（mitentdeckt sein）」（ebd.）。この括弧付きの原料または自然は、幾何学的および運動学的性質だけを残した近代自然科学的な「自然」のことではない[22]。そうではなく、〈自然〉とはここで、製品がそれからできている何かであり、製品の「由来（Woraus）」（ebd.）である。ここで、ハイデガーは、はっきりと道具がそれ自体の「道」を問題にしていることがわかる。たいていの場合、道具的存在者とは〈自然〉から制作された製品であり、おのずから生成するものが現存在の制作行為によって製品として存在するようになったのである。ただし、製品になる以前の〈自然〉はまだ道具的でなかったとか、裸の事物であったと言うつもりは、ハイデガーにはない。

そうではなく、道具の使用においてひっそりと共に発見されている〈自然〉という存在者は、もともと環境世界の内で、「それ自体で、制作される必要のない仕方で（an ihm selbst herstellungsunbedürftig）つねにすでに道具的に存在している」（ebd.）。

最後の論点は決定的に重要であると思われる。〈自然〉は制作されなくとも存在するということ自体はごく普通であるが、しかし、ハイデガーは〈自然〉は制作されなくとも事物的に存在しているというのではなく、道具的に存在していると述べている。逆に言えば、存在者が道具的に存在するためには、観察や熟慮また実践的使用のみならず、制作さえも必要としていない。道具的存在性とは、「それが〈それ自体〉存在しているとおりの存在者の存在論的-カテゴリー的規定」であり、「…のために有用であること」であった。道具的存在者は、それ自体で「…のために有用である」。鋼という〈自然〉は、現存在による一切の働きかけ以前に、それ自体で、ハンマーを作るために有用であり、道具的である。鋼を由来とするハンマーは、この〈自然〉から制作された製品であるが、制作によってはじめて道具的になったのではない。ハンマーが釘を打つために有用であるのは、それが鋼という〈自然〉の本領を発揮できているからである。したがって、道具の有用性は、人間的主観が何らかの作用を遂行する能力に根拠をもつのではない。すると、道具的存在者の概念において問題になっているのは、この存在者自体の存在過程であり、この過程（道）を妨げられずに本領を発揮するこの存在者の存在である。

『存在と時間』の〈自然〉概念はこれまでほとんど研究者の注目を集めてこなかった。しかし、道具の概念が、〈自然〉から制作によって製品ができるという過程から解明されていることは、この概念が、アリストテレス『自然学』の解釈に起源をもつこと、具体的には、それ自身の道を歩む道具の存在が、存在者の「運動（キネーシス）」というアリストテレス的な考えから引き出されていることを十分予想させる。

通称『ナトルプ報告』における『自然学』第一巻の解釈を参照しよう。ハイデガーはそこで、アリストテレス存

在論を全面的に支配しているのは「制作（ポイエーシス）という〈根本カテゴリー〉」（GA62, 394）であるという見解を表明している。注目すべきは、ハイデガーが、この制作カテゴリーの形成において、「（制作交渉の運動性の内で）〈青銅から像が生成すること〉」（395）が「指導的範例」（ebd.）の役割を果たしていることへ注意を促していることである[23]。つまり、制作は人間行動の一類型としてではなく、原料から製品が生成する一つの過程として、存在者がこの過程の内で運動していることとして捉えられているわけだが、ハイデガーによれば、存在者それ自体の「運動（キネーシス）」（394）というこの視点にこそアリストテレス存在論の根本立脚点はある。自然学の根底には「運動する存在者が存在するとわれわれは最初から見なしている」（392）という存在論的洞察があるというのである[24]。道具的存在者の説明において『存在と時間』で用いられた由来・制作・製品といった諸概念が、運動する存在者の存在という発想を受け継ぐものであることはすでに明白だろう。

さらに、「それ自体で、制作される必要のない仕方でつねにすでに道具的に存在している」という先に注目した一節もアリストテレス解釈に起源をもっている。方針は明快ながら素描的にとどまった『ナトルプ報告』の自然学解釈を『形而上学』第九巻を特に参照しつつ改めて展開した一九二四年夏学期『アリストテレス哲学の根本諸概念』での議論によると、森に立っている木は私にとってすでに完成した存在者の現前（エンテレケイア）であるか、あるいは箱を造るために「…のために有用である（Dienlichsein zu..）」ような「幹」として存在する（GA18, 300）。この木は、完成した木であると同時に、可能的に箱であるものとして、「デュナミス的なものとして存在する」（ebd.）。このような考えによると、木から作られて完成した箱も、もはや木とは呼ばれないが、依然として「木製のものであり（holzern）」（301）[25]、すでにずっと（木として）もっていた能力を今こそ発揮していることになる。箱という世界内部的存在者は、それが人間によって制作された後も、それ自体存在し、運動している。ハイデガーがこうした解釈から引き出すのは、原料としての由来をもった道具の有用性や利用可能性は、「私がこれをはじめ

てそう把握するというのではなく、そのものが存在する仕方である」（300）ということなのである。

存在者はそれ自体で運動し存在する。主観による証明なしにはその実在さえ危ぶまれる程に尊厳を失った外的世界の発想にとっては、このように意味と摂理を備えた存在者の自体存在は、古くさい形而上学的仮定にすぎないと思われるだろう。「外的世界」の観念に立脚する場合、外部の存在者の＜力＞について語り得るものは極めて限定されている。上述の「批判的実在論」を引き合いに出すなら、言及可能な存在者の＜力＞とは、物理学的な説明を許すもののことであり、生理学的に解明可能な感覚器官を刺激し、感覚を引き起こす因果的作用である。このように考えた場合、道具の有用性など、物理的性質ではないと思われるものは主観の価値投影に委ねられるしかない。

主観的価値の観念が要請されてくる場面があることは否めない。私たちは、釘を打つためではなく、散在する釘を寄せ集めるなどの逸脱した用途にもハンマーを自由に使うことができる。もし、存在者が何のために有用であるのかが主観の価値判断に委ねられていないのだとすれば、このようなことも不可能になるのではないか。しかし、このような反論は、道具の自体存在の議論をかえって補強するもののように思われる。ハイデガーの議論は、散在する釘を寄せ集めるなど、制作時に意図された用途以外の目的のためにハンマーを使用することもでき、この事実から恣意的な目的設定の余地が与えられることを否定してはいない。むしろ、道具的であることは人間の制作行為に依存しないことを積極的に主張している。だが、問題は、一見恣意的な目的の設定可能性が、釘を磨くこと等の多くの可能性を排除した一定の範囲に限られるのはなぜか、である。まさにその理由こそ、この存在者が鋼を由来として、「制作される必要のない仕方でつねにすでに道具的に存在している」からではないか。鋼からできた存在者は釘を磨くにはもともと「堅すぎる」のである。

五、道具的存在性と事物的存在性――存在カテゴリーの現象学

道具的存在者は、観察や熟慮だけでなく、使用や制作といったあらゆる実践から独立に存在している。この思いきった発想は、道具の実践的構成テーゼにおいては完全に見逃されてきた。したがって、ドレイファスやカーマンが考えるように、実践から独立した存在者の実在性を表現するために、事物的存在性というもう一つのカテゴリーが要請されてくるわけではない。

たしかに、ドレイファスが注目する、ハイデガーの道具の故障状況についての議論は、事物的存在性の本質が実践の欠如にあるという印象を喚起しやすい。ハイデガーによれば、使用中のハンマーが壊れていることが判明するなり、重すぎるものとして発見するなりされるとき、道具は使用を拒むと共に、点検や観察の目立った対象となる。「非道具的存在性（Unzuhandenheit）」（SZ, 73）において、「道具に即して純然たる事物的存在性が自らを告げてくる」（ebd.）のである。事物的存在者に限定されたドレイファスの「粗野な実在論」は、このように、「われわれは時として道具と交渉するわれわれの実践から独立するものとして存在者を経験する」[26]こと、「ハイデガーはこのように出合われる存在者の存在の様態を事物的存在性と名づける」[27]ことに基づいている。

このような解釈は一見穏当であるが、ハイデガー自身は、『存在と時間』の終盤で「実践の消失」（SZ, 357）に「理論的ふるまいの〈発生〉の決定的な事柄」（ebd.）を見いだすという読解を明確に却下している。実際、これまで論じてきたように、「われわれの実践から独立するものとして存在者を経験する」ということは道具的存在者にも等しく当てはまるのであり、実践からの独立性は事物的存在性を特に特徴付けるものではない。序論で引用した一節でハイデガーが述べていたように、「実在性の様態」として機能するのは道具的存在性と事物的存在性なのである。

道具的存在性と事物的存在性の「カテゴリー」に優越の関係はない。ドレイファスらの実践主義者の問題は最終的にはこの点に帰着する。たしかに、現存在は、さしあたってたいていは、事物認識ではなく道具使用に没頭する傾向があるとハイデガーは語っている。しかし、二つのふるまいのどちらが事実的に多いかという問題と、＜存在者が道具的に存在する＞というカテゴリー的理解と＜存在者が事物的に存在する＞というカテゴリー的理解のいずれが優位するかという問題は別である。この点は、カテゴリーの概念の扱いについて第一章で指摘した事柄である。そこでは、存在論的差異の原則とカテゴリーの現象学的概念への着目から、＜自明な存在者の経験の中でどうやって存在が理解されるのか＞という問題設定が生じていた。そして、『存在と時間』においてこの問いへの答えが与えられているのが、まさに、目下検討中の故障状況の議論なのである。

すでに見たように、ドレイファスは、この故障状況の中で＜存在者が事物的に存在する＞ことが理解されることを読み取っている。しかし、彼が見逃しているのは、この状況は、事物的存在性のカテゴリー的理解という局面のみを指し示しているのではないということである。ハイデガーは、道具が目立つことにおいては、「欠けているものが、何のために何とともに道具的に存在していたのか」（75）という指示連関が思いがけず可視的になることを指摘しているが、この指示連関は、道具が十全に使用され、目立たなさの内に保たれている時には、決して主題的に把握され得ないと強調されていたものである。すると、非道具的存在性において道具が目立つことは――逆説的にも――まさに道具が＜何かのために＞存在していたということ、この存在者が道具的存在性において存在していたことが、はじめて把握可能になる好機を与えるのである。したがって、ドレイファスに反対して、松本が指摘するように、故障状況で問題になっているのは、事物的存在性というよりも、「手許性［道具的存在性］についての明示的な理解を獲得するために呼び出された卓越した場面」[28] だと言うこともできるのである。しかし、「ここで問題になっているのは、あくまで手許性（と非手許性）であって目前性［事物的存在性］ではない」[29] とまでは

言えないはずである。ハイデガーは次のように述べている。

「使用不可能なものがただそこにあるということの内には、その存在者が道具事物（Zeugding）として自らを示しているということが潜んでいる。この道具事物はあれこれのように見えているのだが、その道具的存在性においてそのように見えるものとして休むこと無く事物的にも存在していたのである」（SZ, 73）［強調引用者］。

非道具的存在性において今やそれが〈何のために〉道具的に存在していたのかが明らかになるのだが、これとともに、それがまさに今見えているようなものとして「休むこと無く事物的にも存在していた」ことも発見されるとハイデガーは主張している。道具の故障状況は、存在者が道具的であると共に事物的であるということ、存在者は多様に語られるということ、すなわちカテゴリー的に規定されることの経験であると言うべきであろう。

六、物質的自然の実在論

存在者はつねにすでに「道具事物」であるという前節の論点は、「道具」は場合によって価値付与された事物であるという発想も、「事物」は故障状況において時折出現する特殊な存在様態であるという発想も共に否定するものである。それと同時に、本論が論じてきた〈自然〉の概念の重要性をこの上なく際立たせるものである。道具的に存在するのは〈自然（Natur）〉そのものや、これを〈原料（Materialien）〉として制作された製品であるが、この〈自然〉や〈原料〉が「事物（Ding）」と名指されるものの性格をすでに含んでいることは明らかだろうからである。鋼からできたハンマーが適当な堅さと重さをもっていること、つまり、自らの「由来」を指示していることは、この存在者が道具的であることに対して不可欠の要件であるが、堅さや重さはまさに事物の性質として特定可

能なものである。

＜自然＞が一切の実践から独立に存在している以上、これらの性質を主観的作用に還元する動機はほとんど残されていないように思われる。この論点は、事物認識する現存在の様態をハイデガーが「言明（Aussage）」という特定の表現形式に見出す時に判明になるだろう。言明において提示されているのは、判断作用の内で「＜単に表象されたもの＞」（SZ, 154）ではないということ、つまり、「言明が事物的存在者をそれとして規定するその何（das Was）」（158）である「性質（Eigenschaften）」（ebd.）は「事物的存在者そのものから汲み尽くされている」（ebd.）ということをハイデガーは強く主張しているのである。

しかしなぜ、事物の物質的性質は存在者そのものから汲み尽くされると言えるのか。性質は単に表象されたものではないことを現象学的に明らかにしようとする時、ハイデガーは、再び故障状況において「道具事物」が示される場面に定位している。ただし今度は、これを「解釈」と「言明」という現存在の＜作用＞の側から分析する。ハイデガーによれば、利用不可能なハンマーに遭遇する時の自然な語り方は、「重すぎる」とか「別のハンマーを！」といったものであり、これらは「目配り的に理解する解釈」（157）と呼ばれる。この解釈は、非道具的存在性においてこの存在者が道具的に存在していたことを露にする。つまり、「欠けているものが、何のために何とともに道具的に存在していたのか」が解釈の眼目なのである。しかし、この「重すぎる」という表現は、同時に、「この目前の存在者は（…）重量（Gewicht）をもつ」（361）ことを意味することもでき、客観的性質についての言明としても解釈され得る。同一の存在者が「重すぎる」という遂行状況に拘束された解釈を受けることと、「重量」という恒常的に帰属する「性質」において把握されることを同時に許す。このようなことが可能なのは、ドレイファスが想定するように、人間が実践的並びに理論的な二つの「態度」(30) を採りうることに――ましてそれらを恣意的に変更できることに――基づくのではなく、存在者がそれ自体「道具事物」として存在しているからであろう。

「重量」という「性質」が単なる表象でなく、「重すぎる」という仕方で発見される道具の中の事物的存在性とじかに関わっていることは、この例から明らかである。たしかに、この存在者は使用されて世界の内でそれらしく適所を得させられているのではもはやないのだから、「重すぎる」道具はデュナミス的な運動性を失っているのかもしれない。しかしこのことは、主観の認識能力の有限性と＜自然＞の本性の双方からして必然である。というのも、道具は、使用されている限りは、＜自然＞としての由来を隠し、対象化を拒むのであって、逆に、この＜自然＞がそれとして対象化される時には道具は使用不可能になるからである。それでもなお、ずっと道具の内にその由来として存在していた＜自然＞が、存在者の「固有性（Eigenschaft）」という仕方で再発見されているのである。

存在者を「つねに事物的に存在するもの（物質 Materie）」（SZ, 362）と解する近代自然科学的な精神も、上述の重量のような存在者の「固有性・性質」をもった＜自然＞そのものを発見しようとしている。このように言えるのは、ハイデガーが「由来」や「原料（Materialien）」という概念をアリストテレス自然学から借りてきた時、この「由来（Vonwoaus）」（GA62, 391）への探求が、存在者の「アルケー」（ebd.）への探求としての自然の学であることは自明だったからである。「事実的生の配慮的交渉がもつ視界の中では、存在者自体の＜由来＞は隠されている」（ebd.）のであるが、科学こそがこの由来を主題的に探求するのである。

したがって、ハイデガーは、「科学の歴史的発展の古典的事例」（SZ, 362）である「数学的物理学（mathematische Physik）」（ebd.）の本質を、「科学における実験の役割や、実験室のローカルで物質的な条件、またその内で発達した専門的で実践的な技能知の意義」[31] といった環境世界的な脈略に引き戻して考えるべきだと言うラウズのような論者に決して賛成しないだろう。ハイデガーによれば、「数学的物理学の形成にとって決定的なのは、＜諸事実＞の観察を従来以上に高く評価したとか、自然の経過を規定する際に数学を＜応用＞したことにあるのではない」（SZ, 362）。そうではなく、決定的なのは「自然自体（Natur selbst）の数学的企投にある」（ebd.）。この企投は、

「つねに事物的に存在するもの（物質）を発見して、存在者の量的に規定可能な要素（運動、力、位置、時間）に対する主導的な眼差しのための地平を開く」（ebd.）。近代の〝自然学〟（Physik）は、環境世界的な脈略の内に身を隠す＜自然＞の本性に立ち向かって、「自然自体」を「つねに事物的に存在するもの（物質）」として対象化することへと歴史上卓越した仕方で進んだのであり、運動するもののアルケーの学は、運動学的並びに幾何学的な性質を存在者の固有性として発見することになったのである。

しばしば誤解されているように、ハイデガーは物質的自然を近代の悪しき理論的産物とか近代的世界観の現れにすぎないと考えるような、単純な反科学主義者ではない。むしろ、ハイデガーが問題視しているのは、物質的自然が運動する自然に起源をもった世界の実在であることを認めずに、この自然を認識主観によって表象されたにすぎない外的世界という描像で理論的に概念化する――かの実在問題を誘発する――哲学的習慣のほうである。もし、自然科学の発見する運動学的性質が単なる表象にすぎないのであれば、現代技術が近代自然科学に基づいており、この現代技術の一例である「発動機」を実際日々使用しているというような事実をどう説明するのか。この問題に対するハイデガーの態度は、エネルギーというものの発見も自然の中に隠されていたものを「暴露（Entbergen）」することとして考察する、後年の技術論の試みによって最も明らかになるはずだが、ここでは詳述を断念せねばならない(32)。

結

本論では、「存在者は、それを通じて開示され、発見され、規定されるような、経験、知識、把握からは独立に存在する」という『存在と時間』の一節をてがかりに、ハイデガーの存在者についての実在論を明らかにしてきた。そこでの主な主張は、実在問題は、存在者についてのものであり、存在や世界についてのものではないということ、

存在者という場合には道具的存在者と事物的存在者が含まれ、〈現存在のあらゆる実践から独立に存在する〉というテーゼは道具的存在者にも当てはまること、この点を解明しない場合には、事物的存在者の実在性についての十分な理解も妨げられること、であった。これらを論じる中で、〈事物的存在性に対する道具的存在性の優位〉、存在観念論説、カテゴリーの自己所有モデルなど、ハイデガー研究の中でほぼ定着しているいくつかの読解方針に対して異議を投げかけてきた。これらの異議が正当なものであるとすれば、『存在と時間』に現れる他の関連諸概念についても様々に再考の必要が出てくるはずである。一例を挙げれば、世界の構造としての「有意味性（Bedeutsamkeit）」について、主観による一種の意味付与作用を要求するものだという理解を紛れ込ませるのは誤りだと私は感じている。本論四章で触れた一九二四年夏学期講義でのアリストテレス解釈において、ハイデガーは、「デュナミス的にあること」という「現実存在（Dasein）の存在性格を私は随分前から有意味性と名付けている」（GA18, 300）と断っているが、この事実などは、有意味性概念を再考するための大きな手がかりになるだろう。これらを継続中の課題として本論を閉じたい(33)。

註

（1）以下、ハイデガー全集（*Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975ff.）からの引用箇所は、略号 GA に巻数と頁数を併記して指示する。『存在と時間』については単行本（*Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 17 Aufl., 1993）を用い、略号 SZ に頁数を併記する。なお、同一の文献から連続して引用する場合、二回目以降は頁数のみを記す。また、引用文中に注記を［　］内に記すことがある。

（2）Gethmann, C. F., *Dasein: Erkennen und Handeln. Heidegger im phänomenologischen Kontext*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1993, S. 211.

（3）S. 207.

（4）Gethmann 1993, S. 157.

（5） Dreyfus, H. L., “Coping with Things-in-Themselves: A Practice-Based Phenomenological Basis of Realism”, in: *Inquiry* 42, 1998, p. 52.

（6） 例えば次のような一文がある。「実在性は存在論的には現存在の存在の内に基づくと言っても、これによって、実在的なものは、現存在が実存する場合に限りでだけ、それ自体存在する当の何かとして存在し得るということが意味されるということはあり得ない」（SZ, 212）。

（7） Carman, T., *Heidegger's Analytic. Interpretation, Discourse, and Authenticity in Being and Time*, Cambridge: Cambridge U.P., 2003, p. 157.

（8） Dreyfus 1998, p. 53.

（9） cf., Dreyfus 1998, p. 53; Carman 2003, p. 157.

（10） Carman 2003, p. 158.

（11） ibid.

（12） Cerbone, D. R. “World, World-Entry, and Realism in Early Heidegger”, in: *Inquiry* 38., 1995, p. 401; Philipse, H., “Heidegger's “Scandal of Philosophy”: The Problem of the Ding an sich in Being and Time,” in: *Transcendental Heidegger*, ed. S. Crowell and J. Malpas, Stanford: Stanford U. P., 2007, p. 178.

（13） Philipse 2007, p. 180–185.

（14） Carman 2003, p. 201.

（15） 最近のドレイファスは、アリストテレスの徳論を活用しながら、「カントに肩入れして心的なものの神話を定立すること」を批判するという議論戦略を採っている。Dreyfus, H. L., Overcoming the Myth of the Mental: How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise, *APA Pacific Division Presidential* Address, 2005.

（16） Dreyfus, H. L., *Being-in-the-World. A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, Cambridge: The MIT Press, 1991, p. 65.

（17） *Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, Band 5., S. 2357.

（18） 門脇俊介『理由の空間の現象学　表象的志向性批判』創文社、二〇〇二年、第五章註6。

（19） 同書、一五〇頁。

(20) 同頁。

(21) 「存在させる」とは「控え目さ（Verhaltenheit）」であり、後の「放下（Gelassenheit）」につながっていく用語と考えるべきである。このあたりの用語の連関については、法政大学講師齋藤元紀氏と交わした議論等を通じて多くを学んだ。

(22) 『存在と時間』においてハイデガーは、原則的に、道具的なものとしての〈自然〉については括弧を用いており、また、事物的なものとしての自然については括弧なしで言及している。後者については厳密とは言えないが、自然科学の対象としての物質的自然が主題となる69節Bでは例外が無い。本論の最終章に現れる「自然自体の数学的企投」は、この括弧なしの自然の典型である。

(23) Aristoteles, *Physica*, 190a25–26.

(24) 185a12–13.

(25) Aristoteles, *Metaphysica*, 1049a19.

(26) Dreyfus 1998, p. 53.

(27) ibid.

(28) 松本直樹「障害状況（breakdown）からの存在論――ハイデガー『存在と時間』における存在と無との関係について――」、『哲學研究』第五七九号、京都哲学会編、二〇〇五年、八三頁。

(29) 同頁。

(30) Dreyfus 1998, p. 53.

(31) Rouse, J., *Knowledge and Power: Toward a Political Philosophy of Science*, Ithaca: Cornell U. P.. 1987, p. 79.

(32) 『存在と時間』における道具的および事物的存在性のカテゴリーと後年の技術論との関係について一度論じたことがある。池田喬、「新しいカテゴリーとしての「在庫」――ハイデガーの技術論再考」、『論集』第二二号、東京大学大学院人文社会系研究科・哲学研究室発行、二〇〇四年。

(33) 本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。